（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　　石井悠加

本論文は、中世和歌を絵画・空間との相関に着目して分析し、空間の創出と共有、記憶の継承という観点から和歌が持つ役割や機能を論じるものである。序章において本論文の方法と問題意識を明らかにした上で、全体を三部十一章に分かち、まとめとなる終章を置く。

第一部「絵巻『慕帰絵』の和歌」は、本願寺三世覚如の伝記絵巻『慕帰絵』を対象とする。第一章は、本絵巻が四世善如（光養丸）に関わる和歌を多く含み、覚如の傍らに童子姿の光養丸を配する六つの場面を持つことから、その制作意図は覚如の後継者たる善如の存在を強調することにあると論じる。第二章は、巻九第三段に収載される和歌の性質を分析し、本絵巻が覚如の一門意識を強調し、その記憶を本願寺の後代へと伝える役割を有したことを明らかにする。第三章は、和歌の異同から、室町時代に補作された巻七について、覚如の勅撰集入集（没後）に対する関係者の意識を読み取る。いずれも、『慕帰絵』の和歌をその機能と役割の面から捉え直し、和歌による場面創出から絵巻の制作意図を明らかにする新見である。

第二部「和歌と絵巻・絵画の相関」第一章は、真宗の法然伝絵巻『拾遺古徳伝』（覚如撰述）が法然の社頭詠という独自の場面を持つことに着目し、その背景に、弾圧を避けるため、祖師親鸞以来の神祇不拝を廃して権社崇拝へと神祇観の転換を図った真宗教団の戦略を見出す。宗教教団の教義と動向に和歌と絵画が関与する様相を鮮やかに描き出した論である。第二章は、『一遍聖絵』と『遊行上人縁起絵』における白河関での詠歌場面を分析し、和歌説話の影響を指摘する。第三章は、『道成寺縁起』の画中詞に着目し、詠歌表現の類型と歴史が絵巻の場面創出を促す現場を明らかにする。第四章は、佐渡へ流罪となった世阿弥が制作した小謡集『金島書』が、「瀟湘八景・遠浦帰帆」を端緒とする古典引用によって歴史上の流謫者を連想させ、自らの感慨を表出したと論じる。

第三部「和歌と離宮・別業の相関」では、第一章から第四章で北山殿・鳥羽殿・亀山殿・白河殿を取り上げ、各離宮の詠歌空間としての特質を明らかにする。離宮に関連して詠まれる和歌は権力者の居住・政務空間としての場を想起させ、君臣和楽の中でその記憶を共有・継承する役割を担ったことが、歌会記録の集成と分析によって実証的に論じられている。

終章では、絵巻（第一・二部）と離宮（第三部）を空間の記憶や継承という観点で結び、その事実性を保証するものとしての和歌の機能を論じる。

本論文は、鎌倉時代から南北朝時代の和歌について、絵画・空間という観点から様々な資料を渉猟し、実証的な分析によって新見を提示しており、研究史上重要な意義を有すると評価できる。対象の範囲を拡げた上での具体的な検証が必要である点など、今後の課題も存するが、本審査委員会は、如上の研究成果に鑑み、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。